

龍南

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 7
ページ	6 7 - 7 0
発行年	1912-11-18
URL	http://hdl.handle.net/2298/6404

龍 南

ヘツケルの自殺觀

罪な自然科学が、長閑な迷信の扉を、刺激に弱き未開人の官能を痲痺したる鋭きハンマー、で打ち壊して以來は、靜脈を流るゝ血潮のやうな暗色の時流は、敢なくも、ヘーゲルが築き上げたる砂の礎を洗ひ去つて、世は恰も密雲に閉された砂漠の様であつた。しかも、砂漠に彷徨へる時人のために、一のオーシスを發見して呉れた一人がある。エルンスト、ヘツケルは即ち彼である。彼は單なる醫家より出で、生物學の門に入つたのであるが、彼の周密なる思索と、豪放なる論鋒とは、驅つて彼をして遂に生物學的人生觀を作るに至らしめた。強烈な反對、恐るべき排斥の前に立ちながら、彼は嶄新なる理論と翻弄的言辭とを以て、痛快に迷者の迷夢を喝破したのである。彼の男性的絶叫は實に反對者をして自己の耳邊に獅子吼を聞くの思あらしめた。

龍 南

今や、武人の典型乃木大將の自刃に當りて、彼の自殺觀を窺ふも秋の夜長には適しいであらう。彼は先づ、生命を愛すべき神の賜とせる基督教徒が、一方に於て、これを自瀆し返納するに等しい自殺行爲の是非に惑ひながら、他方に於て、他のために犠牲となりて、義勇的自刃をなすを、一大美德として賞揚する彼等の矛盾を笑つて居る。歐洲の社會にては今日なほ、教育ある人士間に於て、自殺は罪惡と考へられてゐる、のみならず或る地方に於ては、自殺行爲をなしたる者は刑罰を受くるのである。異教徒を坑刑に處して平然たりし中世紀に於てすら、自殺者の死骸は刑罰として、埋葬の際に甚しき凌辱を受けねばならなかつた。「この世に於ける權利のうちで、各個人が自身及自身の生命に對して有する權利など確固たるものが、またとあらうか。刑官が若しも自殺者を罪する様な事があるなば、これこそ實に笑ふべきの極である」とシヨウペンハウワアも言つてゐる。ヘツケルは更に論じて曰く、生命とは何であるか、人類個人の生命も畢竟は、他の脊椎動物と同様に、父の精子と母の卵細胞とが、偶然に相遇ふたる

結果生じたるものではないか。この時に於ける偶然
は貴重にして又重大なるものである。個人生存の眞
因は決して天に在します神にあらずして、此世に住
める両親の性慾である。然らば若し生活が、何等の
責任なくして單に受精されたる卵細胞より生れ來れ
る人の子に、望ましき幸を齎さずして、却つて、無
限の苦痛と困難と、またあらゆる病氣と懊惱とを齎
すことがあるならば、此の時に當つて、彼等が自殺
によつて、自己の苦惱を免るゝは、これ彼等當然の
權利ではないか。即ち自殺によつて、人々が堪ふべ
からざる自己の苦悶より免るゝは、實に自己救劑の
方法に外ならぬ。故に人は自殺を以て自己救劑と見、
基督教的博愛の正當なる享受と觀すべきである。決
して舊式道德の呪ふべき見地よりして、彼を自殺と
して責むべきではない。自殺とは、さらすとも無意
義の言葉である。何者、殺とは人の意志に反して、
その生命を故意に失はしめたるものなれども、自殺
は全く自己の意志に従うてなしたるものであるから
である。

されば、自殺者否自己救劑者は、多くの場合同情

にこそ値すれ、これを嘲る如きは不當である。況ん
やこれを有罪となし、または刑罰に處する如きは更
に不當の甚しきものである。しかも、從來の社會道
徳は、他の多くの場合の如く、今日尙はこの無意味
の矛盾を敢てしゝある。

近世の文明國は、國民兵役義務を布いてゐる。義
勇公に奉じて以て、一旦緩急に際しては（その緩急
が如何なる政治的原因より來たにせよ）成るべく多
くの敵を殺すのは國民の義務である。ヘッケルはこ
ゝに痛烈なる諷刺を用いて曰くこれ實に「敵を愛せ
よ」なる福音書の言葉の適切なる説明である。

進んでヘッケルは、その鋭き眼光を現代社會の慘
狀に向け、先づ國家の政策を攻撃して社會政策に論
及し、次に勞働者の窮狀を訴へて、物質時代工業時
代の暗面を撥き、而して最後に決論して曰く、自殺
者の統計が、文明國にありて、常に數の増進を示せ
るは決して怪むに足らない。眞に博愛心を有せる人
士は、失望苦惱せる同胞に對しては、彼等の自殺を
赦して以て、永久の安心立命と、煩惱よりの解脱と
を與ふべしである。

彼は遂に論歩を進めて、自殺は寧ろ或る場合には幫助すべきものであると説いてゐる。次にその論據を概観しよう。文明の進歩は光明と共に暗面をも伴ふものである。剩す處なき天然力の應用、周密なる自然生産物の利用は、近代人の生活に幾多の色彩と歡樂とを與へたと同時に、強烈なる刺激と過度の勞働とは、人類社會の上下階級を通じて、神經衰弱、營養不良の現象を漲らした。精神病院及轉地療養所は夥しく増加して、神經衰弱者及その他の神經疾患者は至る處に充滿し、尙一方にありては貧弱者、後天的不具者は日々食を求めて餓に泣きつゝあるのである。かくて彼等の多數は單に天命に依頼して、死の迫るを待つのみである、彼等の多くは既に日々死しつゝある。而して此等憐むべき多數の敗弱者は寧ろ、死によりて、名狀し得ざる自己の苦惱より遁れんことを熱望するに至る。この際起り來る問題は、怡和の死によりて、彼等の希望を満足せしむるの權利が、吾人に附與せられたるか否かにある。

此於、ヘッケルは論鋒を換へて、同情及博愛の何たるかを論じ、こは元來遠き昔より人類の有したる

必然の性質であつて、決して基督の創始せるものにあらざるを述べ、しかれども聖主及使徒等の努めて唱導傳布したる功績を稱揚してなほ曰く、同情博愛の美德は常に人類相互間に限らずして、これを動物界に對しても押し擴むべきではないか。高等なる動物は相當に感覺と感情とを有するものである。されば吾人に對して有用なる家畜家禽の如きは充分に愛護すべきものである。忠實なる犬、勤勉なる牛馬に對しては常にその快樂を増進し、その苦痛を減却する方法を採らねばならぬ。然るに、彼等にして老衰罹病、苦悶を訴へて止まざる時、吾人は當然彼等を殺すであらう。これ彼等の苦痛を減せんために外ならぬ。人に於ても畢竟同様ではないか。死によつて、止まざる苦悶より病者を救ふは寧ろ義務である。純なる愛に生ける老練なる醫師は、病苦者にして訴へて止まざる時は、一服のモルヒネ、又はチアン加里を與へて、病者の懊惱を永久に去らしむるに躊躇せぬであらう。

以上の見解に於て、彼は稍々近代の個人主義的傾向を持つて居る。「躓く者は打倒せ」とは、嘗て病的

偉人として知られたるニイチエの叫んだ言葉であるが、かくの如きは、畢竟進化論より來りたる當然の歸結と言はねばならぬ。ヘツケルの放奔なる論風は更に進む。家族には勿論のこと、自身にも甚しき苦痛である病的生活を、是非にも續けて行かねばならぬ理由が抑も何處にあらう。生得的病弱者、精神病者、不治病者の多數は、近代の發達したる醫術によつて、御叮嚀にも、社會にとつても自身によつても何等益なき一命を取り止めてゐる。彼等不治病者の生存は實に家族、自治體、國家にとりて甚しき損失である。若しも一服のモルヒネによりて彼等の終焉を見るならば、浮世の悲劇は全くその跡を斷つてあらう。彼等にして正しくその死を欲するならば、無痛迅速に作用する藥劑によりて、自己を苦悶より救はしむべきではないかと。

こは純理性的な冷かな所論ではあるが、又一面には、如何にヘツケルの論風の豪放にして、世俗習慣に拘る所なきかを示してゐる。これ彼が一時甚しき社會の排斥を受けたる所以になると同時に、彼唯一の特長として多くの推服と賛同とを博せる所以であらう。

う。(朔)

編輯室より

○またいろんな都合で發行が遅れて誠にすみませぬ。しかし委員連にも不平もあれば愚痴もある。間違へば氣煩もあるし時には有難いと思ふ事もある。

○本號は多少特別號の意味も含んでゐる。で諸君の御投稿も已むなく次號へ廻した。どうか御承知を願ひたい。

○巻頭の奉悼の辭は部長本田先生の御執筆を煩した。茲に有難く御禮を申し上げます。未熟な連中がさにかくどうかやつてゆけるのは萬先生の御盡力によるのです。

○次號には新進松尾先生の御寄稿も仰ぐ事が出来ると思ふ。其他長江先生小豆澤先生坂田先生大塚先生などへも是非御願ひ申す覺悟です。連中辭令にならず。誠に恐縮してゐる次第です。諸君もどうか是非御願ひ下さい。

○諸君御自身も少し御投稿下さいませんか。次號も既に編輯に着手しました。

○連中も好い加減に疲れたり悟つたりして次號からもう龍南はいり書かうぢやないかなどごぼしてゐます。

○からりと晴れました好い秋の空ですね。

(あの騒々して十字街頭でいやな校正の筆をすて、
十一月十四日連中の一人)